社会調査の表現史
―社会に訴える調査者たち―

松尾 浩一郎

「社会調査」とは何だろうか。試みに広辞苑を引くと、「社会現象について、観察・質問などによって直接データを収集し、分析すること」と定義されている（第6版）。この定義にもあるように、社会調査の最初の根幹となるのは、調査する者が、観察や質問などによって、調査される者に直接的に働きかけ、なんらかの社会関係を持つことである。このような意味で、社会調査は「社会の中の学問」であるといえる。

社会調査は、社会学などの人文社会系の学問研究において、経験的研究をするための一手法として、広く行われている。また、企業のマーケティング活動のなかで、消費者の性向や動向を把握するために実施される調査も、社会調査のひとつであるといえる。自治体や政府が行うさまざまな調査のなかにも、たくさんの社会調査が含まれているといえる。多様な場面で数多くの調査が行われているという意味でも、社会調査は「社会の中の学問」だといってよいかもしれない。

近年の社会調査の特徴として、非常に緻密なテクニックを利用することが一般的になっていることが挙げられる。とくにデータ分析に大きな役割を果たしているコンピュータは、過去には考えられなかったほどの複雑な統計分析を日常的なものにしている。今や数量的データだけでなく、インタビュー調査などで得られる非定型の文章データであっても、テキストマイニングのコンピュータ・ソフトウェアを利用すれば、驚くほど詳細な分析を簡単にできてしまう。

社会調査の技術面での精密化という趨勢は、ある視座から見れば明らかに進歩・発展である。しかしそれは、異なる視座に立てばさまざまな違った捉え方をすることもできる。極度に専門的な統計手法に依拠し、ごく一部の専門家しか理解できないような成果が次々に生み出されている現在、果たしてそこに何か大きな陥穽があるのではないかと疑いたくなるとしても、決して不自然なこ

とではないであろう。

改めていうまでもなく、専門分化や専門性の深化は、ほとんどの分野で不可避に生じているものである。一般的には、そのデメリットがあるとしても、より大きなメリットがあると考えるべきなのかもしれない。しかし社会調査の場合、専門性の深化による代償は、その元来のアイデンティティにも関わるような、無視してはならない大きな問題であるようにも思われる。

たとえば社会調査の歴史を紐解いてみると、そのそもそもの成り立ちは、社会についてのデータ科学を目指すという動機よりも、「社会の中の学問」を目指そうという動機が、より大きかったのではないかと思われる節がある。とくに、ドグマや既存の知の体系に内閉することなく、調査の結果得られた事実――最近の用語法でいえばエビデンス――を広く世間に提示することで議論を興していこうという志向を、社会調査史の黎明期にしばしば見いだすことができる。つまり言い換えれば、そこで目指されているのは、「知るためだけの調査」ではなく「伝えるための調査」なのである。また、伝えるための「表現」の問題に、非常に意欲的に取り組んでいる例を、社会調査史の中に数多く見出すことができる。

いずれにせよ、専門性の壁に守られた専門家の狭いサークルの中に安住することは、こうした社会調査のひとつの源流に見られる初志からいえば [1)]、極めて望ましからざることだといえるだろう。

そこで本論文では、社会調査史研究の観点から、これまでに社会調査を試みてきた人たちが、どのように「表現」の問題と関わってきたのかを跡付け、それら何を意味するかについて考えていくことにしたい。

1. 社会調査史から学ぶ

1.1 社会調査史研究の視点

社会調査の歴史を捉えようとする場合、さまざまな視点・アプローチをとることが可能である。その主なものとして以下の 4 つを挙げることができる。

まずはじめは、社会学史の一下位領域として社会調査史を位置づけるというアプローチである。社会調査はおおむね社会学との強い結びつきを持ってきた。そのような側面を念頭に置いて、社会学の学説・研究の展開に社会調査が果た

した役割を評価していくという方法である（Platt 1996）。

つぎに考えられるのは、社会調査の方法史という視点である。社会調査は社会を研究するためのひとつの技法と位置付けることができる。とするならば、そこで具体的にどのような技術が使われてきたか、その技や道具の切れ味はどのようなものかが、研究のあり方を左右していくことになる。方法史というアプローチを確立したのは、イギリスのG・イーストホープであり、彼の著書『社会調査方法史』（Easthope 1978）は大きな影響を及ぼしている。また、日本における社会調査史研究の第一人者のひとりである佐藤健二（2011）も、同じように方法そのものに焦点を絞り込んで歴史を記述している。

社会調査を支える制度や社会構造に注目するアプローチも重要である。欧米での社会調査史研究を牽引してきたA・オバーシャル（Obershall, ed. 1972）やM・バルマー（Bulmer, ed. 1985）、J・コンバース（Converse 1987）らは、学術の制度化過程や研究組織の構造を追うことで、社会調査活動を広く社会全体の中に位置づけて描き出している。このアプローチをとると、社会調査は社会学界という狭い世界の枠のみにおさまるものではなく、行政やジャーナリズム、アカデミア外の民間研究機関などの活動も視野に入ってくる。

社会調査が単に社会学界の一部分にとどまるものではないと見なすとき、さらに異なる視点の社会調査史研究のあり方が浮上してくる。社会を織りなす人間の営みのひとつとして社会調査を位置づけ、社会調査活動という出来事を素材として歴史と社会のうねりを記述するというアプローチである。つまり、社会調査の社会史を描こうとする試みである。「社会的営為としての社会調査」に着目してドイツやフランスの社会調査史を発掘した村上文司（2005）の研究をその一例として挙げることができる[2)]。

1.2 ポジティビズムの再発見

今日ではあまり顧みられないような事例にも着目して先人たちの調査経験を跡付けることで、さまざまなことを学ぶことができる。筆者はこれまでいくつかの社会調査史研究を進めてきたが（松尾 2004, 2009, 2015）、その中で浮かび上がってきた特に興味深いこととして、ポジティビズム（positivisme, positivism, 実証主義）とは何か、という問題がある[3)]。

今日では一般に、社会調査は実証研究の方法論と位置づけられている。そして実証研究を支える思想は「実証主義」、つまりポジティビズムだとされている。この「実証主義」は、思弁に頼らず現実を観察しデータに語らしめる研究姿勢のことと理解されることが一般的であろう。少なくとも今日の社会学界での通例では、「実証主義」は、経験主義とおおむね近いものとして理解されていると思われる。

それに対して、社会調査の黎明期に目を向けてみると、そこに認められるポジティビズムのあり方は、今日の社会調査界のそれとはかなり違うことに気づかされる。確かに社会調査はポジティビズムに依拠した新しい社会科学研究を目指すという動機とともに生まれ、展開している。しかしそのポシティビズムは、今日通例の「実証主義」という訳語ではなく「積極主義」とでも訳すべき性質のものとして現れ出ているのである。

ポジティビズムの語幹は positif, positive であり、そこには「明白性」「実在性」などの訳語があてられる系列の意味だけでなく、「積極性」と訳される意味が含まれている。社会学・社会調査におけるポジティビズムの概念は、そのうち前者の系列の意味に主として関わって、今日では「実証主義」と訳されたり、「経験主義」とおおむね近いものと捉えられるようになっている。しかし、後者の「積極性」という意味も、ポジティビズムと無関係なわけではない。それは、ポジティビズムの祖型のひとつとなっている A・コントの実証主義哲学が positif を広く捉えていたこと、つまり「実在的」「実用的」「確定的」「精密的」「積極的」「相対的」の六義が含まれていると位置付けていることにも明らかである。

ポジティビズムの変容は、近年の社会調査をめぐる環境の変化にも現れ出ている。昨今では「社会調査の困難」が叫ばれるようになっているが、見方を変えれば、今日ほど社会調査を容易に行いうる時代はなかったであろう。というのも、高性能なコンピュータも、洗練された統計分析手法も、インタビューや質問紙作成のノウハウも我々はすでに持っているからである。調査研究を支援してくれる大学という制度に守られている調査者も多いであろう。さらには官民から調査費、研究費を調達することも難しくはない。しかしこれらは、いずれも歴史通貫的に見れば自明の条件ではない。むしろ、調査活動や研究が禁じ

られたり弾圧されたりするほうが、過去においては珍しくなかったともいえるだろう。

現在とは異なった困難さに直面せざるを得ない状況の中であえて社会調査を行うには、調査者が本当に強く積極的で建設的な、つまりポジティブな姿勢を貫かないと到底無理であろう。それは、単年度の予算の残額を睨みながらルーチンワークのように次々に仕上げられていく今日の一部の調査とは、きわめて対照的である。困難な環境にあろうとも積極的に社会的現実をつかもうとするという意味でのポジティビズムが、黎明期の原始的な調査のなかにはっきりと現れているのである。

歴史上の調査事例は、今日の眼から見れば稚拙な技術しか持たない貧弱なものと評価を下したくなるものがほとんどである。しかし、容易ではない環境にあっても経験主義的な実証研究に挑戦しようとする積極的で建設的な姿勢と調査過程には、むしろ学ぶべきところが多いように思われる。

やや予備的考察が長くなったが、本稿の主題に戻りたい。これから論じたいことは、黎明期の社会調査に見出すことができるポジティビズムの具体的な発現形態のひとつとして、積極的な「表現への志向」を見い出せるということである。

2 失われた技術としての表現

2.1 チャールズ・ブースのロンドン調査

社会調査の起源についてはいくつもの捉え方が可能であろう。旧約聖書の人口調査のような紀元前のできごとにまでさかのぼる見解もある。しかしここでは、近代化が進む社会において社会科学的な問題関心を背景として行われた調査に絞ってみることにしたい。

すると浮かび上がってくるのは、19 世紀の中葉から後半にかけてヨーロッパ、とくにイギリスで行われた一連の調査である。

エンゲルス（F. Engels）は産業化の震源地となった大都市ロンドンとマンチェスターを舞台に、労働者の住宅や生活の状況などを調査し、衝撃的なルポルタージュである『イギリスにおける労働者階級の状態』を 1845 年にまとめている。銅版画の活用で知られる社会風刺誌『パンチ』の創設者であるメイヒュー

（H. Meyhew）は、さまざまな職業の都市生活者を主対象とした観察と調査を行い、『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（1861-62 年）をまとめている。フランスではルプレー（F. Le Play）が統計的な家計調査の手法を取り入れたモノグラフ集である『ヨーロッパの労働者』を 1855 年にまとめている。この時期には他にもこれらに類する調査事例を見出すことができる。

こうした流れのなかに現れ、歴史の画期をなした調査者が、社会調査の先駆者として広く知られている C・ブースその人である。ブースはロンドン全域を対象として市民の生活状態に関する大規模な社会踏査に取り組んでいるが、それは例をみない真に先駆的な挑戦であった。この調査では、急激な発展をとげる近代大都市が抱える格差と貧困問題への関心を背景として、一般の人々の生活状況を定量的に明らかにすることが目指されている。

ブースのロンドン調査は 1886 年に着手されている。巨大な大都市の住民を全て把握しようとするものであったから、計画段階でも他にない大規模な陣容となった。多数の調査員を動員し、3 年間という長期間をかけることが企図された。しかし実際には想定以上に調査は難航し、また、産業調査や宗教調査へと視点が拡大していき、結局 17 年という長い歳月を費やすことになっている。全 17 巻におよぶ最終報告書『ロンドン民衆の生活と労働』（Booth 1902-3）が完結したのは、世紀をまたいだ 1903 年となった。

ブースのロンドン調査は、必ずしも史上初めての社会調査だというわけではない。しかしそれでも、近代的な社会調査の原点であると一般に見なされている。それはなぜか。

まず何より、人口調査など国家レベルの機構や強大な権威・権力が行った調査を除けば、それまでにない大規模なものであったという意味で、ブースの調査は画期的な試みであった。また、繁栄する大都市の内部にも数多くの貧困が存在していることを経験的データを用いて明らかにしたという点で、当時の一般的な社会認識を改めさせる強力かつ広範な影響を及ぼしたことも重要である。さらに、分析法の面でも大きな革新を達成している。主題である貧困を調査によっていかに測定し説明するか。ブースは収入という尺度に沿って貧困の概念を構成し [4]、さらに住居の状態、職業、過密といったさまざまな要素との関係を解きほぐしていくというやり方で、その課題に答えを出そうと試みたのであ

る。

ロンドン調査はきわめて膨大なものとなっており、その全貌を理解するのは容易ではない。さまざまな視点から得られたデータは錯綜しており、ひとつの明確な焦点を結んでいるようには見えない。また、論述は豊富で数多くの町や街路ごとに解説がされているが、そうした具体的な記述からただちにロンドン全体の像が浮かびあがってくるとは言いがたい。

しかしそれにもかかわらず、ブースの調査は「一般に豊かな大都市とみられているロンドンは実際には多くの貧困を抱えている」のだという明快なメッセージを、強く広く送り続けることに成功している。

なぜこうした訴求力を持つことができたのだろうか。まずその理由のひとつとして、調査結果を社会地図で表現したことを挙げたい。

ブースの社会地図は「貧困地図」として知られている。12 枚の貧困地図が作成されており、おおむねロンドン全域がカバーできるようになっている [5)]。実地調査によって得た各街路ごとの生活状態を 7 段階に分け、上層から下層にかけて黄色から赤色、桃色、灰色、水色、青色、黒へと色分けしている。文字通り一つ隔てるだけで、まったく異なる生活世界が広がっていることを明瞭に示している。鮮やかな色彩で描かれた貧困地図のロンドンは、人々に知られていなかった容貌を見せるものであった [6)]。

社会地図というビジュアルな表現は、それまで隠されてきた貧困を可視化するというブースの狙いにはうってつけのものであった。17 巻にも及ぶ膨大な報告書を通して読まなくても、地図を眺めるだけでブースの主張の大要は十分に感じとることができる。

ブースの調査は、社会学史の上でも、調査方法史の上でも、あるいは社会政策史や社会福祉史のなかでも、きわめて大きな影響力をふるっている。しかしそれは、膨大で複雑な調査結果を広く伝えるための工夫がなされ、実際それに成功していることによって、初めてなし得ることができた成果なのだといえるだろう。

2.2 リンド夫妻のミドルタウン調査

豊かな表現力を持ったことがその調査の存在を左右したような事例は、ブー

スのロンドン調査だけではない。たとえば、アメリカにおける地域社会研究の古典として名高いリンド夫妻によるミドルタウン調査も、その好例であるといえるだろう。

ロバート・リンドを中心として 1924 年に着手されたミドルタウン調査は、文化人類学的な実地調査を現代都市で行うことを目指した、それまでに類例を見ない野心的な試みであった。典型的なアメリカの小都市であるミドルタウン [7] を調査地として選び、リンドらはそこに長期間にわたって滞在し、そこでの人と社会の有様をさまざまな場面にわたってつぶさに観察している。その成果は一本の書物『ミドルタウン』（Lynd and Lynd, 1929）にまとめられている。本書は参与観察による地域社会モノグラフの先駆としてあまりにも有名である。

しかしいざ『ミドルタウン』を手にとって一読してみると、そこで何がどのように分析され、何が明らかにされたのかは、リンド本人が結論に書いているように「迷路に入り組んだ状態」（p.243）なままであることに気づかされる。方法の面でも同じようなことがいえる。質問紙調査から観察まで多様な技法が用いられているが、当時の水準から見ても、その個々の技法はとりたて高度なものではなく、むしろ方法への関心に欠けると疑わざるをえないような、平凡で単純なものであった。そもそもリンド夫妻は、調査の中心となったロバートも、それを助けた妻のヘレンも、社会学や社会科学の専門家になる訓練を受けたことさえなかったのである。

しかし調査技術の稚拙さは、書物としての『ミドルタウン』の失敗にはつながらなかった。むしろ本書は広く読書人に迎えられ、売れに売れたのである。「最初の年の 1929 年のうちに増刷に次ぐ増刷となり、その年度で 6 回の印刷回数を数え」（中村 1990: 373）たという。「ベストセラーになり、その後 8 年間に、大恐慌時にもかかわらず、1 冊 5 ドルで 32,000 部が売れ」（園部 2008: 17）、今日まで版を絶やすことなく読み継がれている。

このように、『ミドルタウン』は一般の読者にアピールするものとなった。なぜこうしたことが可能になったのであろうか。これもいろいろな要因や巡り合わせが働いていたのであろうが、書物としての魅力、とりわけ、記述のおもしろさや文章表現の巧みさが大きいものと思われる。日本語版の訳者である中村八朗は「まったくもって訳者泣かせの凝った文体」で「おそらく夫妻が苦心

を重ねて練り上げたであろう文体」（中村 1990: 370）と述べている。英語の言語表現について十分に論評することはできないが、少なくとも、いかにも専門的な学術書であるという文章とは程遠いことは確かである。

リンド夫妻の記述のスタイルは、1930 年代以降のアメリカ社会学を強力に牽引したシカゴ学派のリーダーである R・パークの文章表現とは、明らかな好対照をなしている。パークは極めて平易で簡潔、明解で厳密な文章を書いた人である。彼の書いたものは大変に明瞭で読みやすいが、そこに滋味のようなものはほとんど感じられない。科学としての社会学を標榜したパークとシカゴ学派の態度が、単純明快な文章に象徴されている。

パークは新聞記者出身であった。通説ではその経験がフィールドワークやデータ収集への強い志向につながったとされている。実は R・リンドも実業界での前歴があった。彼はミドルタウン調査にかかわる以前には、出版社で雑誌編集や広告業務にたずさわった経験を持っている。R・リンドはこうした経歴があったからこそ、ただ本を書くだけでなく、それを多くの人に届けることに高い意識を持っていたのではないだろうか。そのための魅力的な文章表現であり、魅力的な本作りであったように思われる [8]。

2.3 調査技法書のなかの表現

初期の社会調査者たちが表現への志向を強く持っていたことは、ブースとリンドの事例だけでなく、さまざまなところから読み取ることができる。その一例として、社会調査の技法書、教科書での記述のされ方に注目してみたい。

アメリカにおいて社会調査の教科書が出版されるようになったのは 1910 年代頃からである（Platt 1996: 14-5）。しかしその中でも、とくに大きな影響力を及ぼした教科書をひとつ挙げるならば、P・ヤングが 1939 年に出版した『科学的社会調査法』（Scientific Social Surveys and Research）に指を折るのが適当であろう。本書は 1960 年代後半まで幾度も改版され、長きにわたって広く利用されている。

その初版を見ると、データ分析の技術を事細かに解説することに紙幅の大半を割くような今日の社会調査の教科書に見慣れた我々にとっては、意外といってもよい構成と内容からなっている。全 600 ページ余りのうち、冒頭からの 100

ページは社会調査史についての記述に費やされている。その後ようやく方法論や技法の解説へと進んでいくが、その内容や書かれ方は今日のそれとは大きく異なる。まず「データとは何か」について考察した上で「フィールドでの科学的な観察法」へと論を進めていくのだが、そこで「科学的な観察法」のひとつとして写真撮影が大きく扱われている。さらに続けて質問紙作成法、インタビュー法、歴史資料の分析法、事例研究法、統計分析法と進んでいくが、こうしたデータ収集法が説明される章を受けるのが「グラフィック・プレゼンテーション」の章なのである。ここでは各種のグラフや地図やダイヤグラムを使って、いかに表現するかが詳しく説明されている。

このように表現の問題を教科書のレベルで大きくとりあげることは、その後急速に社会調査の技法が「発展」し、社会調査が学問研究の世界の中で制度化されていったのと反比例するかのように、ほとんど見られなくなる。社会調査は当初持っていた表現への意識をしだいに失っていったのである。

3 社会に訴える調査者たち

3.1 アカデミズムと社会調査

初期の社会調査が表現に積極的であったことは、それらの調査の背景や担い手の立場とも深く関わっている。過度の単純化を恐れつつあえていえば、多くの社会調査が学問研究のためでなく社会改良のために行われていたのである。また、社会調査は学究を目的とした大学人のものではなく、実践家のものであったのである。

19 世紀の大学では、まだ社会科学は十分な地位を築いてはいなかった。20 世紀初頭になっても状況は大きくは変わっていない。そして、アカデミアの中でもさらに小さな社会科学の世界は、基本的には文献資料に依拠することに徹しており、経験的調査を自らの方法としては認めてはいなかった。こうした状況は、アカデミアだけでなく、社会問題をめぐる論壇にも共通するところがあった。

C・マーシュ（Marsh 1985）は興味深いエピソードを紹介している。1880 年代にロンドンの仕立職人を対象に貧困調査を行ったジャーナリストのメイヒューは、「まったく信用できない貧者自身の言い分をデータとしたせいで公知の

事実に矛盾した結果をみちびいている」という旨の批判をされたのだという。現場で当事者を調査したことが、研究としての評価を高めたのではなく、むしろ低める結果となったのである。社会科学も論壇も、現実に目を向けるよりも書斎の世界を優先するきらいがあった。

前節で論じたブースもリンドもいわゆる大学人ではなかった。ブースは大実業家としての人生を送り、調査に関わるようになるのは第 2 のキャリアにおいてであった。リンドはキリスト教団体の活動の一環として調査を行っており、大学に移りアカデミアに迎えられるのは『ミドルタウン』で名声を得てからのことであった。

大学人が大学の世界のみを念頭において発言する場合、議論のコンテクストを濃密に共有しているので、すでに確立された一定の形式にのっとって表現すれば、十分な伝達・コミュニケーションができる。むしろ表現形式を崩すことは、集団内のコンテクストを乱す、歓迎されない行為にもなりうる。

しかし特定のコンテクストの枠組みに収まりきらなくなるとき、事情は大きく変わってくる。仲間内だけでのコミュニケーションではない場合や、相手の認識構造そのものに変容を促そうと働きかけたい場合などにおいては、定型化された表現方法の効力が期待できなくなるであろう。調査者は自分の知見を伝えることに工夫が必要になるのである。さらにその知見が、それまでの常識を更新したり、過去に知られていない知識を追加するようなものであれば、このことはなお一層当てはまる。

社会調査とは、とくに黎明期のそれは、まさにそのような状況において行われるものであった。書斎志向のアカデミズムの枠組みからは離れて、知られていない社会的現実や、知らしめたい問題状況を、経験的データを活かして多くの人に伝え理解してもらおうとする。そのためには、信頼性や妥当性といった点も重要になってくるが、いかに表現するかといった点もより緊急の課題になるのである。

1930 年代ごろまでの社会調査の歴史を概観すると、「社会に訴える社会調査者」ともいうべきイメージが浮かび上がってくる。こうした側面は、ブースやリンドのような今でも高く評価されている古典にも見出すことができる。また、その他の現在ではかえりみられない数多の「無名」の調査においても、こうし

た特徴を顕著に見出すことができる[9]。これから「社会に訴える調査」のいくつかの事例を見ていきたい。

3.2 社会学的写真家ハイン

まず取り上げたいのは社会学的写真家と呼ばれたハイン（Lewis W. Hine）である。今日ではハインは1920年代前後のアメリカにおいて児童労働問題に関わった写真家として記憶されている。しかし彼自身は社会学者と自称することもあったように、単なる写真家の枠には収まらない部分で非常に重要な働きをなしていた（松尾 2004）。映像社会学の中興の祖であるH・S・ベッカーも、彼を社会学の流れに位置づけて論じている（Becker 1974）。実際、社会調査史の流れのなかでも、ハインの活動は重要な位置を占めているといえる。

ハインは1874年にアメリカ合衆国ウィスコンシン州で生まれている。シカゴ大学で社会学などを学び、ニューヨーク大学の大学院に進んで1905年に教育学の修士号を得ている。その後、地理教師となることから職業的キャリアを歩み始めている。

カメラは19世紀末に実用化され、急速な技術革新とともに普及の端緒につき始めていた。ハインがそのような最新機器であったカメラを手にしたのは地理の授業の教材づくりが目的であった。多文化都市ニューヨークの諸相を写真に収めようとしたのである。最初に取り組んだのはエリス島での入国審査を待つ移民たちの撮影であった。被写体の多くは東欧からの移民であった。複雑な境遇にある彼ら彼女らの表情を見事に写し取っている。こうした移民の実際の姿を見せることで、生徒に移民問題をリアルなものとして感じてもらおうとしたのである。

その後ハインは社会改良運動に深く関わるようになり、教師を辞して撮影活動に力を注ぐようになる。ハインの活動の土台をなしたのは、「写真による調査」というアイディアであった。このアイディアは、社会改良運動のなかで近しくなったP・ケロッグの後押しを得て実を結んだものである（Kaplan 1992）。ハインは全米児童労働委員会の委嘱をうけ、1908年から1925年まで、当時社会問題となっていた児童労働の実態を明らかにし、それを告発するための調査や撮影に取り組んだ。

彼は写真を世論に訴える技法として位置づけていた。文筆活動はほとんど行わず、写真による記録と表現に集中した。そこで、写真の力を最大限に発揮するために工夫され編み出されたのが、フォトストーリー法と呼ばれる方法である。何枚もの写真を意味ある順番に並べ、それにキャプションをつけていくという、いわゆる組写真である。今ではあたりまえの手法であるが、そのひとつの起源はハインの活動に求めることができる。

さらに講演会用のスライド、展覧会、パンフレット、写真をコラージュしたポスターなどをみずからデザインし、積極的に使用している。写真の訴求力を最大限に生かそうと試みたのである。彼は調査・撮影のためにアメリカ中を旅しているが、それとおなじように、自分の撮影した作品を携えて児童労働の禁止を訴える講演の旅も続けた。

ハインの写真には明瞭な表現上の個性を見いだすことができる。労働の現場で撮影された子どものポートレイトにとくに顕著であるが、人物を撮影する場合、被写体となった者の表情が精細に描写されていることに目を見張らされる。特にレンズを凝視する厳しい視線が目立っている。

彼が主に使った機材は 5×7 インチの乾板式箱型カメラであった。手軽に操作できるものではなかった。また、彼はピント合わせの容易なパンフォーカスではなく、背景をぼかして主題である被写体の表情を浮き上がらせる手法を好んだ。この方法だと慎重かつ精密なピント合わせの作業が必要になったはずである。このような機材でこのような表現を目指すために、被写体の協力を得つつ、時間をかけた丁寧な撮影をしていたものと思われる。おそらくハインは、撮影の困難さが高まるという問題よりも、被写体の表情そのものが持つ世論に訴える力を利用し、表現力を高めることを優先したのであろう。

ハインは写真家として写真の美しさを強く追求していた。しかしその美しさというのは、根底にある社会学的関心、つまり社会改良への貢献という目的に従属するものだった。

彼の写真は一般にドキュメンタリー写真とか報道写真とよばれるジャンルに含められているが、事実の客観的な記録に厳格に徹していたわけではなかった。被写体にポーズをとらせてポートレイトを撮るというセットアップ写真である。20 世紀の社会調査が守ってきた原則、つまり調査対象への非介入という原則は、

そこには存在していない。ハインは調査対象への積極的な介入を厭わなかった。むしろ彼の写真のなかには、被写体との共同作業とでもいうべき印象を受けるものさえ少なくない。

このようなハインの手法は、記録としての真正性や信頼性には疑いを差し挟む余地を生んでいる。しかし彼の写真からは圧倒的なリアリティを感じるのもまた確かである。根底にある社会改良という目的にかかわって、社会学的表現力が見事に発揮されているのだと考えたい。

3.3 ケロッグのピッツバーグ調査

「社会に訴える調査者」の例となるのはハインのみに限らない。むしろ、1930年代頃までのアメリカにおける社会調査では、アカデミックな関心に終始するもののほうが少数派であったといってよい。それは、総合調査と呼ばれるような大規模な調査プロジェクトであっても変わらない。

「社会に訴える」という性格が色濃く現れている総合調査の事例として、ケロッグ（Paul U. Kellogg）が主宰したピッツバーグ調査をとりあげてみいたい。

社会事業家として知られるケロッグは 1879 年にアメリカ合衆国ミシガン州に生まれている。コロンビア大学を卒業後、雑誌 Charities の編集者となる。この雑誌は「慈善」という誌名からわかるように、社会事業や社会改良をテーマにしたものであった。のちに Charities and the Commons と改題され、さらには The Survey へと誌名を改めていくなかで、ケロッグは同誌を主宰するようになる。

The Survey はケロッグの活動の拠点となった。編集、執筆、取材を通じて彼は積極的に社会問題にコミットしていく。その活動はいわゆる慈善活動に止まるものではなかった。彼は観察と報告、つまり「調査」の重要性に着目していた。調査結果をもとに世に訴えるというスタイルをとるようになる。雑誌のタイトルを The Survey に改めたのもその現れである。ケロッグは雑誌というメディアを調査報告の場として活用していく。

調査者としての彼の活動のハイライトは、1907 年から翌年にかけて行われたピッツバーグ調査である。ピッツバーグ調査は広い視野を備えた総合調査であった。地理、政治経済、鉄鋼労働者、家族の生活、女性労働、移民、地域社会

などが主な調査対象となっている。経済学者、政治学者、社会学者、ジャーナリスト、社会事業家などが多数動員された。産業化が進む大都市が生み出した複雑な社会問題を科学や学術の力からジャーナリズムの力までを動員して明らかにし、それに立ち向かっていこうという問題意識が底流をなしていた。ブースのロンドン調査からの大きな影響も受けている。アメリカにおいては前例のない、大規模な調査となった。

ケロッグは職業研究者ではなく、アカデミズムとの間には一定の距離があった。しかしだからこそ、前例のない挑戦的な調査に漕ぎ出すことができたのかもしれない。彼はディレクターとして、大所帯からなる調査チームを強力に先導していった。極めて大規模な総合調査であるから、先立つ資金も相当のものが必要になる。この難題は、当時設立まもないラッセル・セイジ財団の援助を獲得することで解決していった。

彼の編集者としての感覚は、ピッツバーグ調査の端々にあらわれている。報告書は数字や統計表などの調査結果の羅列ではなく、全編が読み手へ訴えかけるものとなっている。報告書の分量は膨大なものとなっているが、写真、絵画、地図、図表が多用されており、親しみやすい雰囲気がある。写真撮影にはハインを起用した。ハイン特有のスタイルで、移民労働者などのピッツバーグ住民の生活が見事に表現されている。印刷や製本も質が高く、手にとるものに何かを訴えかける力がみなぎっているように感じられる[10)]。

ケロッグの調査は「調査のための調査」ではなかった。「観察と報告」を旨とした彼の調査は、単に調べるだけでは完結せず、それを世に伝えることも不可欠な柱となっていた。当然ケロッグは学界だけを念頭に置いていたわけではない。広く世間に訴えて、世界を変えようとした。そのための媒体が雑誌 The Survey だったのである。

ピッツバーグ調査は当時のアメリカ社会学界や社会事業界に大きな衝撃を与えた。シカゴ学派社会学が都市調査に乗り出していく際にも、ピッツバーグ調査は無視できない最重要の準拠点とせざるを得ないものであった。しかし、科学としての社会学を追究したシカゴ学派にとって、アカデミズムの枠にとらわれないピッツバーグ調査は、何としてでも乗り越えるべき準拠点であった。シカゴ学派の都市研究が次々に成果を上げ学界での地位を確実なものとしていく

過程のなかで、まずピッツバーグ調査は激しい批判の対象となり、そしていつしか言及さえされなくなっていったのである。

3.4 ジャーナリズムとの狭間で

ハインやピッツバーグ調査のように「表現」に積極的であった調査者たちの事例を概観してきたが、ここでひとつの疑問が浮かんでくる。ハインもケロッグも大学ないしアカデミズムとは距離があった。学術的な質を求めなかったからこそ、表現に力を入れることができたのかもしれない。つまり、表現としての質の高さと研究としての質の高さは、相互に背反するトレードオフ関係にあるのではないだろうか。

ここで想起されるのは、社会調査とジャーナリズムの関係である。両者はそれぞれ異なる世界を確立してはいるが、ファーストハンドの情報を得て、それを整理し発表するという点では、共通しているということができる。とくに質的調査とルポルタージュやドキュメンタリーは、一見したところ区別がつかないほど似ている場合もある。

しかしアカデミックな社会調査の世界では、「ジャーナリスティックである」という言葉は、ある調査を批判的に評するための言辞として使われてきた。ハインはベッカーが再評価するまでは、フォト・ジャーナリズムという別の世界の人とされ、社会調査の世界で検討の対象となることはなかった。ピッツバーグ調査は、同時代においては学術的達成をなしとげた社会調査と認められていたにも関わらず、シカゴ学派からの攻撃を受けるなかで、分析や理論的整理が不十分でジャーナリスティックな学術的価値の低いものと位置づけられるようになっていった[11)]。

ジャーナリズムは研究の世界とは異なり、タイムリーであることや多くの人に伝えることは必須の条件となるし、また、ときにはシャープに意見を主張すべきこともある。ジャーナリズムの筆の力、表現力の高さは、こうした条件から必然的に生まれてきたものであるといえる。しかし同時に、報道や言論の裏をとるための取材活動も、ジャーナリズムの核心となる要素となっている。実際のところ、研究者よりもジャーナリストのほうが、現場に広く深く関わっているような印象を受けることもないではない。

しかしそれでも、ジャーナリストの記事や作品が社会調査として評価されることは、極めて稀である。それはなぜだろうか。いろいろな解釈が可能であろうが、ジャーナリズムの「取材」とアカデミズムの「調査」の相違に注目して、その理由を理解することが最も適当であろう。

あえて二分法的に区別するならば、取材で収集された情報はそれ自体が「確からしさ」の根拠として使われる。それに対して、調査で収集された情報はあくまでもデータであって、「確からしさ」の最終的な根拠はデータ分析の結果に求められる。アカデミズムにおける調査の世界は、五感での見聞よりもデータの分析に信頼をおくという、近代科学の価値観をもって発展してきたのである。

表現と研究のトレードオフはここに関わってくる。研究の文脈で調査を行う場合は、学界で共有されているデータ分析法を適用することで、自らの調査結果の「確からしさ」を主張することができる。ひとつのアカデミック・コミュニティの内では、そこでの流儀に従いさえすれば、調査者は特段の表現の工夫はせずとも十分に伝えることができる。むしろ、余計な表現技巧を付け加えるのはノイズでしかない。しかし、そのノイズとされる表現の工夫は、一定の分析手法という約束事を共有しない世界においては、むしろ「確からしさ」を伝えるための最も重要な手段となるのである。

以上のように考えてみると、表現と研究のトレードオフ関係が成り立つには、前提条件があったことがわかる。そのひとつは、調査者がアカデミック・コミュニティの外と深い関わりは持たないということである。そしてもうひとつは、アカデミック・コミュニティの内でデータ分析の方法と論理が確実に共有されているということである。

このふたつの前提条件は、20 世紀中頃の一時期には、社会調査をめぐる学界、とくに社会学界において、かなりの水準で満たされていたといえるだろう。しかし、1970 年代以降の社会調査の転回を経験した今日においては、もはや必ずしも自明のものだとはいえなくなっている。科学観や学問をめぐる状況が大きく変化している現在では、これらふたつの条件は、さらに急速に霞んでいくことも現実的になりつつあるように思われる。

そして、20 世紀初頭までの社会調査の黎明期においても、以上のような面に

おいては今日と同じ状況があったのである。初期の社会調査が表現に積極的であったのは、このような背景が影響していたものと考えることができる。

4 社会調査の精緻化と社会学の制度化――とくに量的調査と質的調査の関係から

これまで論じてきたように、社会調査における表現、あるいは社会学研究における表現のあり方に関して、さまざまなことを社会調査史から学ぶことができた。そのなかでも要点となるのは、黎明期の社会調査は表現への志向を強く持っていたことであり、そうした志向は今日のアカデミアにおける社会調査には継承されていないものだということであった。これらのことと関連して、最後にもうひとつ触れておきたい論点がある。いわゆる質的調査の歴史的展開について、とくに量的調査と質的調査の関係についてである。

表現志向から分析志向への変化が生じた理由としては、この論考で暗示してきたように、社会学における科学主義化の進行をまず第一に挙げることができるだろう。それが多様な調査表現の試みを抑圧することにつながっていた。しかしそれを、20 世紀の中頃をピークとして社会調査が統計的なサーベイ調査――いわゆる量的調査――に傾倒していったことと完全に重なり合うものとして理解すべきかといえば、必ずしもそうとは言い切れないようにも思われる。

確かに、量的調査における技術的な洗練と精緻化が、社会調査の歴史の流れを大きく転回させる影響を及ぼしたことについては争う余地はない。しかし、そのような理解をするときに、もし仮に量的調査に対立するものとしての質的調査の存在を想定し、それを量的調査が抱える諸問題から自由なものだと位置付けているとすれば、その認識を適切なものということはできない。というのも、表現と研究のトレードオフ関係が生み出される主な要因は、データ分析の方法論が確立されていくことそのものにあった。それは質的調査にも例外なく生じていたからである。

質的調査はしばしば量的調査に対立するオルタナティブとして捉えられるが、時期こそ遅れたとはいえ量的調査と同様に方法論上の洗練や精緻化が進んできた。質的調査法における精緻化は、とくにデータ分析の局面に関してのものであった。例えば、グラウンデッド・セオリー（GT 法）、エスノメソドロジー、

会話分析、テキストマイニングなど。これらはいずれも非定型質的データを分析する方法を提案するものである。

量的調査の場合はデータ分析だけでなく、質問紙作成法や尺度構成法といったデータ収集の面でも、方法論の精緻化が重ねられてきた。それと比べると、質的調査の場合は、データ収集法には本質的な変化は起こっていないといってよいであろう。そのぶん、質的調査の方法論上の工夫は、むしろデータ分析技術に集中しているのである。とすれば、表現から分析へと重心が移行する現象は、質的調査でも同じように生じうるし、実際に生じているように見受けられる。

つまり問題となるのは、科学主義的な数量分析への傾倒だけではなく、質的調査も含めた社会調査や社会学の制度化という、より深い次元での動きも重要である。

社会学は 19 世紀後半の誕生以来、つねに新しい学問だといわれてきた。哲学や数学や物理学といったより長い伝統にもとづく学問にくらべると、その発祥も発展もかなり遅いものであったのは動かしがたい事実である。社会学はアカデミズムにおいては新参者であったから、その中での地位を確立するまでに大変な苦難を経験してきた。20 世紀初頭にウェーバーやデュルケム、ジンメルといった巨人たちによって社会学の骨格が固められていった時点でも、大学に社会学者としてポストを得ていた研究者はほとんどいなかった。20 世紀前半の社会学においては、学問としての地位を築くことが、自身の存在を賭けた課題となっていた。

そのための戦略の柱となったのが科学主義化であり、それを基盤とした学問の制度化であった。それは過度に思弁的な議論や情緒的な主張を排し、経験的な論拠にもとづく堅固な論理を組み立てようとすることであった。また、そのようなスタイルの研究をする専門家集団として、自分たちコミュニティをアカデミア内に築くことであった。

たとえば何度か言及してきたシカゴ学派社会学を例にとってみると、その初期（おおむね 1910 年代まで）と最盛期（おおむね 1930 年代）では、相当に異なるスタイルで研究が進められていた。社会学史の視点から 1918 年までの初期シカゴ学派について研究した M・ディーガンによれば、初期のシカゴ大学の社

会学は E・パーク以降のそれとは異なり、科学的であることをそれほど意識しておらず、当時のアメリカ社会科学の通例どおり、キリスト教や社会事業と極めて近いものであった（Deegan 1988）。キリスト教との深い関わりを持ち続けたスモールやヘンダーソンらの研究や、アダムズらを中心としたハルハウスでのセツルメント活動も、シカゴ大学における社会学の重要なひとこまである。とくに後者は、ピッツバーグ調査のような社会踏査運動と非常に近い存在であった。

さらにディーガンは、科学という価値を最優先するパークらによって、これらの歴史が「隠蔽」されたのだと主張している。また、アカデミック・コミュニティのメンバーは男性であるべきだと考えるパークによって、女性が重要な役割を果たしていた社会改良・社会事業の系譜が意図的に排除されていったのだともいう。

こうしてパーク以降のシカゴ大学の社会学者たちは、科学主義的な社会学を築き上げることで、アメリカのアカデミズムにおける社会学の地位を高めるのに多大な貢献をした。シカゴ大学はアメリカで初めて大学院課程を持つ社会学科を設立している。また、これもアメリカで初めての本格的な社会学専門学術雑誌である American Journal of Sociology を創刊している。シカゴ学派は、科学主義化とあわせて、雑誌や学会組織をコントロールすることで、社会学の制度化を先導したのである。

これまでややネガティブな評価を含ませて社会学の制度化過程を描写してきたが、学問の歴史的展開のなかでは、良くも悪くも制度化の進行は避けがたく生じるものである。ここでいう制度化とは、具体的にいえば、理論枠組や分析方法の精緻化と収斂、学問領域の境界線の確定、学会や大学といった研究者集団の成立、共通の知識体系の伝達と人材育成システムの形成、外部から承認される権威づけ、といったことある。それらを欠いて学界が社会的存在としての地位を固めることは難しい。

社会学における質的調査は、過度の科学主義化の進行に対するアンチテーゼとしての役割を果たしてきた。しかし、制度化の進行という点に着目すると、それは質的調査の世界も例外ではない。質的調査というさらに小さな領域での制度化が生じているにすぎない。

制度化が進むということは、そこにひとつの小さなアカデミック・コミュニティができあがることを意味する。質的調査を専門とする研究者のコミュニティに活気が生まれることは歓迎すべきことである。しかし調査者が自分の調査を伝えるオーディエンスとして、そのコミュニティだけに目を向けるようになってしまうのは、必ずしも良いこととはいえない。

今日のわれわれには、学問研究としての水準を落とすことなしに、学界の枠に閉じこもらず広く議論をおこしていくことが、課題として改めて強く求められている。表現への志向に根ざした調査研究に挑戦していた黎明期の調査者たちの姿は、われわれにとっても見倣うべきモデルになりうるように思われる。

注

1) 社会調査の源流にはここで論じたようなものとはまた別の系譜もある。たとえば権力が社会を censor しようとする試みも、社会調査の重要な原点のひとつとなっていることは否定できない。そうした側面についてはまた別に論じたい。松尾（2015）も参照。

2) 調査過程に注目する必要性があることは浜谷（1994）が指摘したところでもある。こうした社会調査史研究の視点については石川（1994）や川合（2004）の議論からも学ぶところは大きい。

3) 本稿でのポジティビズムに関する議論は藤田（1996）を参考にしている。松尾（2015）も参照。

4) ブースは週あたりの世帯収入額を主な指標として貧困の操作的定義を行い「貧困線」を画定することを試みた。Easthope (1978) を参照。

5) ブースの貧困地図はインターネットでも見ることができる。チャールズ・ブース・オンライン・アーカイブ（http://booth.lse.ac.uk/）では、貧困地図と現在の地図を比較対照させたり、報告書での記述と突き合わせたりすることができる。

6) カラー刷の社会地図という表現方法じたいも、ブースは後に続く者へ強い影響をおよぼしたといえる。たとえば 1890 年代に行われたハルハウスの調査（Residents of Hull-House 1895）や、デュボイスによるフィラデルフィア調査（Du Bois 1899）などを例としてあげることができる。

7) ミドルタウンとは仮名であり、実際にはインディアナ州マンシーのことである。この仮名にはアメリカのどこにでもあるような平凡な小都市を象徴しているのだとう意味が込められている。

8) もちろん『ミドルタウン』の作品としての確かさは間違いのないものである。しかし、アカデミズムに受け入れられたのは、作品の質が高かったからだけでもないように思われる。当時のアメリカ社会学界では、都市を舞台にした経験的研究を重ねたシカゴ学派が急速に力を持つようになっていた。ライバルであるコロンビア大学は、シカゴ大学に対抗する必要に迫られていた。そこで注目されたのがR・リンドであった。シカゴ大学とはまったく違ったやり方で都市社会の経験的研究を成し遂げていたリンドは、コロンビア大学の次の一手としてうってつけの人物と思われたのである。こうしてリンドは社会学教授としてコロンビア大学に迎えられることになったのである（園部 2008）。

9) 念のため付言しておくと、いうまでもなくその「無名」とは、調査の質の低さであるとか、調査が行われた時点での影響力の小ささを直ちに意味するものではない。あくまでも現在に至る学問研究・学界の流れの中で継承関係が途絶えてしまったということでしかない。

10) ピッツバーグ調査の成果はCharities and the Commons誌上で数次にわたって発表された後、あらためてKellogg ed.（1914a; 1914b）ほか数冊の単行本にまとめられている。

11) 両者の境界線上で地位を保つことができた稀有な例として、リンドのミドルタウン調査を挙げることができる。リンドもジャーナリスティックとの批判を受けることがあったし、実際にそのような側面があることも否定できないが、コロンビア大学という一大勢力に守られたこともあって、巡り合わせのいたずらのように最終的にはアカデミズムに受け入れられた。

文献

Becker, H. S., 1974, “Photography and Sociology,” *Studies in the Anthropology of Visual Communication*, 1(1): 3-26.

Booth, C., 1902–03, *Life and Labour of the People in London*, 3rd ed., 17 vols., Macmillan.

Bulmer, M., ed., 1985, *Essays on the History of British Sociological Research*, Cambridge University Press.

Converse, J. M., 1987, *Survey Research in the United States: Roots and Emergence 1890–1960*, University of California Press.

Deegan, M. J., 1988, *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892–1918*, Trans-action Books.

Du Bois, W. E. B., 1899, *The Philadelphia Negro: A Social Study*, University of Pennsylvania Press.

Easthope, G., 1974, *A History of Social Research Methods*, Longman.（川合隆男・霜野寿亮監訳, 1982, 『社会調査方法史』慶應通信．）

藤田弘夫, 1996, 「情景・社会学・1996」『三田社会学』1:16–22, 慶應義塾大学.

浜谷正晴, 1994, 「社会調査史の方法的視点」, 石川淳志ほか編『社会調査：歴史と視点』ミネルヴァ書房, pp.327–36.

石川淳志, 1994, 「社会調査史研究の視角」, 石川淳志ほか編『社会調査：歴史と視点』ミネルヴァ書房, pp.313–26.

Kaplan, D., 1992, *Photo Story: Selected Letters and Photographs of Lewis W. Hine*, Smithsonian Institution.

川合隆男, 2004, 『近代日本における社会調査の軌跡：社会観察・調査と社会学』恒星社厚生閣.

Kellogg, P. U., ed., 1914a, *The Pittsburgh District: Civic Frontage*, Survey Associates.

――, ed., 1914b, *Wage-Earning Pittsburgh*, Survey Associations.

Lynd, R. S. and H. M. Lynd, 1929, *Middletown: A Study in American Culture*, Harcourt Brace and Company.

Marsh, C., 1985, “Informants, Respondents and Citizens,” in Martin Bulmer, ed., *Essays on the History of British Sociological Research*, Cambridge University Press, pp.206–27.

松尾浩一郎, 2004, 「『見る社会調査』の源流：フォトジャーナリズムと都市社会調査」『日本都市社会学会年報』22: 121–36.

――, 2009, 「Positivismの再発見：期待と挫折の社会調査史」社会調査史研究会公開研究会口頭発表, 於一橋大学.

――, 2015, 『日本において都市社会学はどう形成されてきたか：社会調査史で読み解く学問の誕生』ミネルヴァ書房.

中村八朗, 1990, 「訳者解説」, リンド著・中村八朗訳『現代社会学大系9 ミドゥルタウン』青木書店, pp.370–9.

Oberschall, A., ed., 1972, *The Establishment of Empirical Sociology: Studies in Continuity*, Discontinuity, and Institutionalization, Harper & Row.

Platt, J., 1996, *A History of Sociological Research Methods in America 1920–1960*, Cambridge University Press.

Residents of Hull-House, 1895, *Hull-House Maps and Papers: A Presentation of Nationalities and Wages in A Congested District of Chicago*, Thomas Y. Crowell & Co.

佐藤健二，2011，『社会調査史のリテラシー：方法を読む社会学的想像力』新曜社.

園部雅久，2008，『ロバート・リンド：アメリカ文化の内省的批判者』東信堂.

Young, P. V., 1939, *Scientific Social Surveys and Research: An Introduction to the Background, Content, Methods, and Analysis of Social Studies*, Prentice-Hall.